〈死〉からの再出発
―ヘンリー・ヴォーン小考（三）―

森田　孟

ヘンリー・ヴォーン（Henry Vaughan, 1621–95）は一六五〇年に、長短七三篇の作品を集成した詩集を公刊した。『火花散る燧石――宗教詩と個人の叫び集成』*Silex Scintillans : or Sacred Poems and Private Ejaculations* である。五年後にはそれに新たに同類の五六篇の詩を追加し、改めて作者自身の長文の凝った些かならずくぐもった調子の序文を付けた「二巻による」「第二版」（この表現は不正確であること、言うまでもない）が上梓されたので、この詩集は一六五〇年刊行の第一部と、一六五五年に付加された第二部とから成る。

一六五〇年版には、版画の題扉 Title-page が付いていて、下半分に表題と著者名、出版元、出版年が記され、上半分には、風に吹かれる雲の中から突き出された右腕が、心臓の形をした燧石とそれを摩擦して火を起こす道具を握っている、という図柄である。ぶら下った凹凸の石からは二滴、ぽたぽたと雫が滴っている。

よく見ると、その石は片側が人間の顔にみえてきて、雫は涙らしくなるのだが、この図柄の解釈の「発見」に関しては、ルイ・マルツが、友人の示唆で気付いたと語る生彩に富む一節を物している［ML・五］。

実はこの題扉の標章については、作者自身が十六行のラテン語詩 “Authoris (de se) Emblema”［M・三八六］を書いていた。その詩と題扉は一六五〇年版にのみ見られるもので、一六五五年版からは消えてしまった。如何なる詩で

あるか。フォウグル版テキストに付載されている英語散文訳によってその内容をみてみたい。ヴォーンは自らをどのように認識していたのだろうか。そのような作者による詩集の姿はどうなるのか。

著者の（自らを表わす）標章
The Author's Emblem (of Himself)

余りにもしばしばだったと、私は告白するが、御身は私を傷つけずに摑まえようとしてきた。御身の言葉なき声は絶えまなく私を本心に返らせようとし続けた。御身の神聖な息吹は、穏やかな動きによって私を説き伏せようと努めて、聖なる囁きで警告したが、無駄だった。私は聾唖の身、燧石（ひうちいし）だった。そこで御身は別のやり方で、私を改心させることに同意する（何と偉大なことか、親しい者への御身の世話ぶりは！）。即ち御身はやり方をすっかり変えて、今や立腹して宣言する、愛では巧くいかないのだと。御身は力で以て力を征服しようと企てるのだ。御身は攻撃を開始して、あの丸石、私の石の心を粉砕する。石だったものが肉になる。見るがよい、それは粉々に砕けている！ほら、その破片は遂に天国に向かって御身に対して発光しており、私の頬は燧石から絞り出された涙で濡れている。同様に御身の身内にとってはいつも先見の明に富んでいたことだが、御身はかつて命じたものだ、乾いた岩々に溢れ出よと、そしてそそり立つ岩々に洪水を起こせよと。[1] 何たる驚異の極みか、御身の手は！死ぬことによって私は新たな生命を勝ち得たのだ。世俗の財産をすっかり失くして[2]初めて、私は今、これまでより裕福なのである。（F・一三七）

訳註

（1）「出エジプト記」17・6。モーセが岩を打ってイスラエルの子供たちに水を与えた話［F・一三六］。

（2）ここでヴォーンが言及している、身に振りかかった不運が正確には何だったか不明。おそらく一六四八年の弟ウィリアムの死か、もしかすると健康を害したことか、内乱の悲劇かが、彼の心中にあったものだろう［同］。

〈私〉には、「御身」と呼び掛ける超越存在があった。〈神〉である。その「御身」の「驚異の極み」である手によって、聴けども聞こえず見れど見えない石ではあるが為

され方次第では火花を発する燧石である［と自分自身を把握・認識する］〈私〉が、「粉砕」されて〈本来の私〉になれた喜びを示す標章だと、あの図柄を自ら解釈してみせるのである。世俗の財産――これは無論、物質面だけのものではない――を失って初めて富裕になったのだ、即ち、死ぬことによって新たな生命を勝ち得たのだと言挙げするのである。

その〈私〉が、「御身」のお陰で豊かになれた自らの姿を披露しようというのがこの作品集なのだから、まず〈神〉への献辞が示されるのは当然であろう。一六五〇年版には、「献辞」“The Dedication”と題される十四行詩が冒頭に載せられたが、それを「Ⅰ」として、一六五五年版には仰仰しい表題と共に「Ⅱ」の部分が付加された。次の作品である。

我がこの上なく慈悲深く、限りなく愛情溢るる、親しく愛さるる〈贖罪主〉にして、常に祝福されている、唯一〈聖なる〉〈公正の人〉、生きている神と神聖な処女マリアとのなせる御子イエス・キリストへ

To my most merciful, my most / loving, and dearly loved Re- / deemer, the ever blessed, / the onely Holy and / Just One, / JESUS CHRIST, / The Son of the living / GOD, / And the sacred / Virgin Mary.

Ⅰ

我が〈神〉！　私のために逝き賜いし御身、
御身にこれら御身の死の果実を捧げます。
死は私には生命（いのち）で光であったものだが
御身には暗くて深い激痛でした。
御身の全てを蘇らせたもう血の幾滴かが
我が心臓に降りかかり、それで心臓は蕾となり
このように芽吹いたのです、尤も〈主〉よ、大地が
呪われ　蓄えが尽きてしまうまでですが。
実は私はここで何人か雇っていました
御身の望みを長らく阻んでいた者を
彼らは　御身に〈奉仕する者たち〉[1]を石もて追い
御身を御身の〈愛〉[2]ゆえ殺してしまおうと動いたのです、
しかし、〈主〉よ、私は彼らを追い払いました、そして身
　を屈めて
請い希っています　御身が御身の〈借地人の地代〉をお収

め下さるようにと。

Ⅱ

尊き〈主〉よ、それは終りました！　そして今それを
真似た者が　御身にそれを差し出すのです。
それは最初　御身のものでした、それが御身に戻るのです
御身から輝き出ていたものが、ここでは燃えるのです、
〈太陽〉が岩に当っている時、正しいだろうか
それを岩本来の光だと言うのは？
否、同じように私には言えません、これは私のものだとは
畏れ多いイエス様、これは全て御身のものですから。
御身の衣服には（衣服を纏われている時に）
御身からの光と徳とが備わっているので
今（その時にこの場所でのように）
御身は哀れな襤褸屑にもやはり恩寵を下されるのです
これは御身の愛が注ぐ誠実
ある人々の頭上に輝く〈**灯火**（ともしび）〉[3]で
遂には御身の費用で彼らは
すっかり不滅の衣服を纏わせてもらうのです。

我が尊き〈贖い主〉にして世界の光
そして生命でもある我が心の喜びよ！
御身の慈悲の全てと真理が
我が罪深き若き日に私に示されたが故に、
大半が穏やかだった時に我が悲しき失敗（しくじり）の数々と
御身への取り乱した不満にも拘らず
我が密かな欠陥の全てと　たびたびの逆戻りと
我儘な違反の各々にも拘らず
御身に逆らうつもりで為した全ての企てと
公にしたあらゆる己惚れにも拘らず
それらを御身は神々しくも許し賜うたのだった、
御身の血で私を天国のように白く洗い賜いながら、
私には御身に差し上げるものは何もありません
これしか、私に賜った御身自身の贈物しか、
それを拒まないで下さい！　今や　御身の〈**標**（しるし）〉で
御身にはお判りになるのですから　心が破れているのはど
こかが。

「ヨハネの黙示録」第一章第五、六、七節[4]

私たちを愛し、御自らの血で私たちを罪から解放して下

さった方に。
また、私たちをその父なる神のために御国の民として祭司として下さった方に、世々限りなく栄光と権力とがあるように、アーメン。
見よ、その方は雲に乗って来られる。全ての人の眼は、殊に彼を刺し貫いた者どもは、彼を仰ぎ見るだろう。また地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむであろう。然り、アーメン。

（M・三九四―九五）

訳註

（1）Servants.（2）Love.　共に一六五〇年版でのもので一六五五年版ではいずれも小文字で始まる語。その他句読点が数か所違うが、字句は同じ。一六五〇年版には「I」だけだった。

（3）「ヨブ記」29・3「あの時は、彼の灯火が私の頭上に輝いた」［F・二六五］。彼の光によって私は暗闇を歩んだ、と続く。

（4）ヴォーンは欽定訳版を使用して、十七世紀までは行き渡ることのなかった音韻上の語形“kindreds”ではなく、初期の形“kinreds”を保持している。OEDを参照［F・二六六］。

一六五〇年版では、右のうちの「I」が「献辞」とされ、それに続いてすぐ最初の作品となっていたが、一六五五年版には、次の、標題なしで段落記号「∬」を付されただけの十二行の詩が、第一部の最初の作品の前に置かれた。これから作品に目を通すことになる読者への心構えとして提示されたものだろうか。作者と読者のそれぞれの役割に関するヴォーンの見解が示唆されているようだ。

∬

無益な〈才気〉と眼は
捨てて　賢くなろう
乱用するな、神聖な火は避けて
真実の涙で君の泥沼を洗い流せ。
涙とこのような炎はまもなく穏やかになり
盲人のために眼の膏薬を調合するだろう。
涙はきれいになり　必ず柔軟になる
そして火は　君の無情な覆い（ヴェール）を剝ぎ取るだろう。
そうすれば光が来る！　それを君が見張っていて
そのために自分が裸であるのが見えてきたら

彼を讃えたまえ、惜しみなく贈物をなさるのだから
君には涙で、私には火で。　　（M・三九六）

こうして燧石から火花が散り始めることになる。「再生」と題される作品から出発するのは、甚だ示唆に富む。この作者は〈死〉んだことによって新たな生命を得たと自ら言うのだから。順に四篇を眺めてみよう。

再生　Regeneration[1]

〈保護〉下にあり依然　拘束されていたが　ある日
　私はこっそり戸外へ出た
あたかも春酣で　ずっと[2]
　サクラソウが咲き乱れて　陰っていた、
　それなのに　内部は凍りついていて
　　険悪な風が
私の幼い芽を萎ませ、罪が
　〈雪〉のように私の心を翳らせた。

2

こうして嵐が吹き荒れた、私は率直に我が春を
　　単なる段階と認めて示すのだ
私の散歩は途方もない山のようなもので
　〈岩々〉と雪で粗造りされているのだと、
　しかも〈巡礼者の眼〉が
　　安堵とはほど遠いまま
憂鬱な空を測定し
　それから滴となり悲痛のあまり雨となるようにだと、[3]

3

そう　私は上を向いたまま嘆息した、ようやく
　　踏み出したり倒れたりしながら
私はその頂点に達したのだ、そこに天秤が
　置かれているのを見つけて
　それを持ち上げて一方の皿に
　　最近の苦痛を乗せ
他方に煙を乗せた、すると快楽が重さを示した
　だが更にもっと重いと判った　穀粒の方が。

4

そうと判って誰かが叫んだ、**〈立ち去れ〉**と、率直に私は
　それに従って赴いた
真〈東〉へ、美しく瑞々しい野辺なら見い出せたであろう

誰かがそう呼んだように〈**ヤコブの寝台**〉[4]を、それは
〈未開墾(ヴァージン)の土〉で　誰もこれまで
　荒々しく足を踏み入れていなかった、
そこを〈彼が踏み込んで以来〉行けるのは唯
予言者たちと〈神〉[6]の御友人がただけなのだ。[5]

5

ここで私は休んだ、しかしおよそ十分には落ちつけない、
　小さな森が堂々と
高く聳えているのが見えた、その枝々は
　四方八方で交錯し合っている、
　私は入っていった、一たび中に入るや
　　〈それを見て驚いたが〉
全てが変化したことに気付いた、新しい泉を
　私の感覚の全てが出迎えたのだ、

6

浪費家の〈太陽〉が　活力溢るる黄金を撃ち壊して
　無数の破片にし、
天空はその紺碧を広げながら
　雪の羊毛で市松模様になり[7]
　空気はすっかり芳しくなり
　灌木の茂みという茂みは
花冠で飾られる、こうして私の〈眼〉は楽しんだが
　〈耳〉はすっかり静まった。

7

小さな〈噴泉〉だけだった
　〈耳〉に幾らか役立ったのは、
それで物言わぬ陰に言語が費したのは
　噴泉の涙の〈音楽〉だった、
　私はその泉に近づいて気付いたのだ
　　泉の〈水溜め場〉は
様々な石で一杯で、或るものは輝いていて丸く
　その他のものは形が悪くてどんよりしていると。

8

最初のものは〈願わくは留意を〉光のように素早く
　洪水の中を踊っていた
だが、夜より重い最後のものは
　〈中心〉に釘付けになっていた、
　私は大いに訝った、が　遂に
　　考えるあまり疲れてしまい
私の落ち着かない〈眼〉は依然として待ち望みながら

馴染みのないような物を持ち込んだのだった。[8]

9

それは花咲き乱れる堤で　そこで私は気付いたのだ
（時あたかも真昼だったが）
熟睡している者もいれば　ぱっちり眼を開けて
〈光線〉を取り込んでいる者もいることに、
ここで長く物想いに沈みながら、私は聞いていた
激しい突風を
それは尚も勢いを増したが　どこから吹き出すのか
それがどこなのか　私には見当がつかなかった、

10

私は身を翻して陰の各々へ向かい
急いで〈眼〉を配って
見ようとした　木の葉がそよとでも
動こうとしたのか〈返事〉をするのかと、
しかし耳を澄しながら　それがどこにあるのか
どこにもないのか知ることで
心を鎮めようとしていると
それは囁いたのだった、**〈私が望む所に〉**[9]と。
主よ、と　そこで私は言った、**私に一呼吸を、**
そして私を　死ぬ前に死なせて下さい！　と。

「雅歌」第五章第十七節[10]

起れ　おお北風よ、来たれ　そなた南風よ、そして我が国
を吹いて、その香が流れ渡るように。（**M**・三九七―九九）

訳註

（1）おそらくG・ハーバートの「巡礼」“The Pilgrimage”の影響がある［**M**・七二八］。
（2）弟トマスの著『光より出づる光』*Lumen de Lumine*, 1651. p.6. に類似の表現がある［同］。
（3）最初からここまでは、トマスの前掲書 pp.1-2. の文章を参照せよ［同］。十行ほどたっぷり引用してある。
（4）「創世記」28・11、19参照。ヤコブはその場所をベセル（神の家）と呼んだ［**F**・一四〇］。
（5）「ソロモンの知恵」7・17（ジュネーヴ版）は言う、知恵は年々「聖なる魂に入り込んできて」「神の御友人がたと予言者たち」を生み出すのだと。そして「ヤコブの手紙」2・23では、アブラハムは「神の御友人」と呼ばれていた［同］。

（6）第5、第6連には、トマスの前掲書p.2.からの8行ばかりに、類似の表現、心象があることに注意［M・七二八］。
（7）Checqur'd.　同じくトマスの前掲書p.4.に類似の表現［同］。
（8）第9連は同じくトマスの前掲書p.15.の4行ばかりを参照のこと［同］。
（9）「ヨハネによる福音書」3・8「風は思いのままに吹く。そなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかは知らない。霊から生まれる者も皆それと同じ」［F・一四二］。
（10）これは、「雅歌」4・16であるべき。ヴォーンは、ジュネーヴ版の「起これ、おお北よ、来たれおお南よ、そして和が園を吹いて…」を欽定訳版の「目覚めよ、おお北風よ、来たれそなた南風よ、我が園を吹いて…」と混合している［同］。

死　Death

対話

魂　悲しい〈土地〉だ、一日にして
こんなに汝を衰えさせたとは、そうなると死は
汝の血を凍らせて〈氷〉にし、汝は留まらねばならぬ
小作人に〈何年〉もの間、〈何世紀〉もの間、
汝はどのようにして堪え忍ぶのか？――

肉体　私には分らない――
だが感覚の全てが　汝と共に翔回るのに
何か重要なものが尚も死者のまま残されるなら
私は我が〈カーテン〉を開けて自らを解放したい
こんなに暗く悲しい寝台から、
夜な夜なの寝座（ねぐら）、暗く陰った天空、
そこでは影が濃くなり、〈雲〉が
年中〈太陽〉の眉に掛っていて
経帷子なしに動くものは何もない、

魂　それはそうだ、だが　我々が動き回った
あの夜汝が見たように　我々の最初の試みは鈍くて
行き当りばったりだったが、根っからの〈習慣〉は
我々の恐れるものであり、堕落は軽蔑されるのだ
だからあのぞっとする**十二人**[1]が通り過ぎた時
我々はそれでも赤らんだ〈**東**〉のために呼吸して

怠惰な〈太陽〉を急がせた
それで確かに希望を　長い間だったが堪能した

しかし　あの〈雲〉が罅割れて
その〈裂け目〉に光が現れるのを見た時
それではその日はだらけた日にはならないと思い
我々の恐れたものを喜んだのだ、

正にそのようなものだ　死というのは。しかし汝は
汝の母の胸で眠らせてやろう
どの位近くを〈贖罪〉が這っているのか
私が一刻一刻知ろうと呻いている間も。

だから我々は再び相い混り合おう、そして合体すれば
これは最後の良夜、我々の〈太陽〉は決して沈まないよ。

「ヨブ記」第十章第二十一、二十二節(2)

二度と戻って来れない闇の、死の陰の国にさえ私が出かけてしまう前に、
その国は闇そのもののような闇で、如何なる秩序もない、
死の陰の国で、光が闇と同じ所なのだ。

（M・三九九―四〇〇）

訳注

（1）キリストの十二人の弟子。「ぞっとする」“gastly”というところが曲者ではないか。
（2）欽定訳版と同じ（F・一四三）。

復活と不滅　Resurrection and Immortality

「ヘブライ人への手紙」第十章第二十節(1)

彼が御自分の肉である垂れ幕を通って、私たちのために用意して下さったあの新しい生きた道によって。

肉体

I(2)

しばしば私は見てきた、死を擒縦自在に
　扱うあの蘇生させる息が
寝台の上の死んだ生き物に生命を与える力を吹き込むと
　まどろんでいる蚕が　あの長い眠りから
　　覚めて這い出してきて

弱くて幼いブンブン唸るチャイムと　自ら物言わぬ
〈細胞〉の辺りの弔鐘を聞きながら
やがて[3]遂に活力溢るる〈光線〉を一杯浴びて
彼女は飛び去っていった、
生命(いのち)と感覚を誇り
天国の豊かな〈費用〉を使って、
その出費は（空しい物！）手段と範囲の度合のような
丸々二つの〈要素〉から成ると看做されている。
では考えることにしようか　そのような摂理は私には
あまり友情を示さないだろうと。
あるいは彼は　不公正であることに耐えきれるだろう
自らの〈契約〉を我々の埃とさえ結ぶのだからと。

魂

2[4]

哀れにも、難儀な不平分子よ！　このためだったのでは？
私が汝に　在るもの全てを教えたのは。
腸(はらわた)の抜かれていない自然は　汝に示したのだ　健康回復
の手段を[5]
衣服の〈変化〉を
どれほど我々が死について
全く誤りを犯しているかを、
何故なら何ものも〈**無**〉に陥ることは有り得ず[6]依然として
技能によって一体となり
それから戻ってゆき　事物の子宮から
もたらすからだ〈**不死鳥**〉の如き
再生といった宝を
生命と若さを、
というのも　維持する霊が尚も　この〈栄光の讃歌(ミサ)〉の
せいで汚染されずにすむのだから、
それで　それに陥る全てを弁別し、生み出し
稔らせるのだ、
それに　こうして苦しんでいるのを我々が
承知しているその誕生が　すっかり
台無しにされることもない、しかし時の絶え間なき波が
その生れたものの実体を堕落させ
更に一層気高い〈**精髄**〉が　彼の家は
病んでだらしがないと見届けると
彼は、相変らず若くて、飛び立ってゆくのだ
あの泉へと

諸々の霊の**源**へと、そこで彼は己が運命を受け取るのだ
　時がもはや彼の無気力な〈小屋〉を腐らせたり
しなくなるまで、それは（脇に棄ておかれているが）
　何か小粋な〈花嫁〉のように
ある日すっくと立ち上り　きらめく光を纏って
　すっかり清らかに輝いて
あの魂と再婚することだろう、汝が唯　再び
洗練されるに到るのは　何より明白なのだから。

3

そこで私はここで　鏡の中を朧気に[7]
　霧と影だけが通り過ぎるのを見、
それら独自の〈**輝き**〉によって泉と
　事物の〈進路〉を探し求めながら
　それら全ての道を〈照らし出された光線〉で
　刺し貫こうとするだろう、
それで汝が見たとおり、私は考えた末　赴けたのだ、
　天国へ、あるいは下の〈大地〉へと
何か〈**星**〉とか〈**鉱物**〉を読み取りに、そして〈堂々〉と
　しばしばそこに留まった、
　それで汝はそれから私と共に
　（二人共　翼を備え、自由に）
あの強力で永遠なる光の中を彷徨うことになろう
　そこでは荒涼たる陰や夜は
我々に敢えて近づいたりしないだろう、我々はそこでは
　もはや星々を見詰めることや　陰鬱な
　雲の中を凝視して言ったりしないだろう
　〈**真昼**〉**があってくれたらいいのに**！[8]　と。
そこでは永久に続く〈**安息日**〉が護られることだろう
〈**後継者**〉なしに、〈**太陽**〉なしに。

「ダニエル書」第十二章第十三節[9]

ともあれ終りまで　あなたの道を行きなさい、あなたは憩いに入って、時の終りにあたり、あなたに定められている運命に従って立ち上ることだろう。（M・四〇〇―〇二）

訳注

（1）ジュネーブ版に近い［F・一四四］。

（2）第1連には、ヴォーンが祖述した散文『オリーヴ山、即ち孤独な祈禱』（*The Mount of Olives: or Solitary Devotions*, 1652）の中の一節（M・一七七、七―三二行）を

参照せよとの示唆［M・七二八］。

（3）ここからの6行は、Felltham, *Resolves*, i. 47.「死について」“Of Death”との類似を示唆［同］。

（4）この詩の2と3の部分は、直接、間接に錬金術関係の著作物の影響を受けているとして、［HEi］（本稿の参照文献表に挙げてある）他の文献に言及し、この作品の解読に欠かせない詳注がある［M・七二九―三〇］。

（5）recruits. この語を「健康回復の手段」の意で用いている例としてOEDがこの箇処を挙げている［F・一四五］。

（6）For no thing can to *Nothing* fall. Donne, “The broken heart”, 1.25. に “Yet nothing can to nothing fall.” がある［M・七三〇］。

（7）「コリント人への第一の手紙」13・12「私たちは鏡におぼろに映ったものを見ている…」［F・一四六］。

（8）「申命記」28・67「…朝には『ああ夕であればよいのに』と言い、夕には『ああ朝であればよいのに』と言うだろう。」［M・七三〇］。

（9）ジュネーヴ版［F・一四六］。

最後の審判　Day of Judgement

火が〈北〉をずっと突進して
〈東〉へと運ばれてゆき
火の奔流のように掠め飛び
〈南〉を〈西〉を一掃してゆく時、
全てが流れてゆき、辺りを明るく照らし
　驚くべき炎で
星々と〈諸元素〉を混合し
　それらの名称をすっかり削り取る時、
御身が聖なる雷の貯えを
　あの熱の中で　それも御身の
六日間の建設の槌の音が始まる前と
　同じように低い熱の中で費やす時、
仏頂面のように天空が通りすぎ
　すっかり消え失せて
夜と昼とを支え上げるあの広大な空間に
　元のままであるものが何もなくなる筈の時、
騒がしく突風が大海原を引き裂き

大地の子宮から
もう一つの誕生に際して眠れるもの全てを
　喚び起こす時、

御身が〈雲〉を座席にし
　野外では
卑小偉大を問わず〈生者〉も死者も
　御身の法廷に赴かねばならぬ時、

おお　そうなっては余りにも手遅れとなろう
　〈私はどうすればいいのだろう?〉などと言っても
それでは**悔い改め**は時期はずれであり
　慈悲もまた　そうなのだ、

覚悟を、だから私に覚悟をさせて下さい、おお〈神様!〉
　そして　私が感じ取れるようにして下さい
我が愛する父の〈**鞭**〉が
　罪人を殺しているのだと!

お与え下さい私に、おお私にここで〈十字架〉を
　更にもっと苦痛を貸し与えたまえ、
結局は健康をもたらす薬は
　苦くとも　この上なく貴重なのだ、

〈主〉よ〈神〉よ!　私は請い求めません　友人も富も
　どうかその両方共　遠去けて下さい、
私は恵まれるだろう　三つのもの、私の魂の主な健康を!
　それらの一つは同じように嫌なのだが、

生きている〈**信仰**〉、肉の〈**心**〉[1]、
　〈敵〉としての〈**世の中**〉を、
この最後のものは最初の二つを新鮮に保ってくれるだろう
　そして私にもたらすだろう、私が居るべき所を。

「ペテロの第一の手紙」第四章第七節[2]
今や万物の終りが近づいている、だから思慮深く振る舞い、身を慎んでよく祈りなさい。　（**M**・四〇二―三）

訳注

（1）「エゼキエル書」11・19「私は彼らに一つの心を与え、

彼らのうちに新しい霊を授け、彼らの肉から石の心を取り
去って肉の心を与える」[M・七三〇]。

（2）ジュネーヴ版（F・一四八）。

この次の作品が、本誌前号（五六ー五九）に拙訳を示した「宗教」“Religion”である。「再生」「死・対話」「復活と不滅」と続いて、生と死が、再生と復活という形で問題にされ、不滅に思いが及んで「最後の審判」まで瞑想されれば、どうしても宗教を考えねばならなくなろう。「宗教」に続く作品が、次の「探索」である。

探索　The Search

今日は澄み渡った日だ、私は〈薔薇〉の
芽を明るい〈東〉に認めて露（あらわ）にする
〈巡礼者なる太陽〉を、一晩中私は
〈無我夢中〉で動揺しながら過した
我が〈救い主〉を見い出さんものと、私は出かけていた
遥か遠くベツレヘムまで　そして見たのだった
あの御方の〈宿〉と〈揺り籠〉を、そこに居て
私は〈**賢者がた**〉に出逢って訊ねたのだ　どこでなら
あの御方は見つかりそうか、とか、どのような星なら
今あの方を指して〈人間〉に成長したと示せるのかと。
エジプトへとここから私は逃げてゆき　運んだのだった
彼女の乾き切った胸をナイルの岸辺まで
彼女の年ごとの乳母として、そして戻ってきて
〈**博士たち**〉の間を訊ね回り、〈**礼拝堂**〉を見たいと
切望した、それなのに、ささやかな塵を
示されたのだ、そして〈町〉のためには
灰の山があったが　そこで言った者がいる
小さな明るい火花は寝台なので
それは或る日（柱の下で）
目覚めて　それから全体を洗練するだろうと。
　ここで疲れた私は　スカル[1]へやって来る、そこから
〈**ヤコブの井戸**〉へ、それはそれ以来彼の息子たちに
遺贈されたのだ（そこでしばしば彼らは
あの穏やかな黄金の〈夜な夜な〉
引き連れる羊の群に水を飲ませ　清浄な
日々を過ごしながら　家へ〈天幕〉へと駆り立てたのだ、
ふさふさ羊毛で覆われた一連りを）、そしてここに（おお

運命！）
私は座る、そこはかつて我が〈救い主〉がおられた所。
憤った〈泉〉が　泡立ちも激しく膨らんで、
泡が一杯になるとふっと静かな溜息をつき
囁いた、**イエスはそこにずっとおられた**
だが　**ヤコブの子供たちは聴こうとしなかったのだ**　と。
それ故去り難い思いのまま　遂に私は立ち上るものの
しかし我が〈眼〉には泉が湧き出し
ここで新たな探索が命じられる、
彼は見つかる筈だ、彼が血を流した所にと、
私はその庭を歩く、と　そこに見えてくる
彼の〈苦悶〉による〈**観念**〉が、また
彼の尊いお顔を血塗れの汗に浸す感銘深い苦悩の数々が、
私はその〈丘〉を登って行き　精細に調べた、あの
私は得るところがあったが彼には大いなる損失だった〈十字架〉を、
木は決してこのような実を結ばなかった、
〈魂〉の〈**慰め**（バルサム）〉や、肉体の至福のようなものは、
しかし、おお彼の御墓よ！　そこには〈記念碑〉が
添えられていた〈彼は何も持っていなかったので〉
汚れのない切り出されたばかりの新品だった、
しかし〈**隅の礎石**（コーナーストーン）[2]〉はなかった、
確かに（とその時私は言った）私の〈探求（クエスト）〉は無駄なのだ
彼は見つからないだろう、彼は殺されたのだから
余りにも温和な〈子羊〉は　決して
あれ程の血と〈残虐〉の中には居られない、
私は〈荒野〉へ向かおう、そうなれば人間より
慈悲深い獣を見い出せるだろう、
彼はそこで無事に生きていた、それは彼の退却だった
激しいユダヤ人からの、ヘロデ大王の激情からの、
残虐の行く手に立ちはだかった四十日からの、
そして地獄の激烈なる誘惑からの、
そこで彼は〈熾天使たち〉と語り合った
自らの父の炎立つ聖なる務めのことを、
彼は彼らの**歩み**を波立たせ、眼で
あの荒々しい陰を〈天国〉にした、
かくして砂漠は聖別され
彼の花嫁[3]の避難所になった、
私はだからそちらへ行こう、さあ、〈今こそ〉だ、
〈太陽〉が雲間から現れて　道案内をしてくれた。

しかし私はこうして先を急ぎながら、私の〈旅〉に
花を添えてくれるのはどのような喜びなのか
どれ程静まった小道なのか、如何なる陰か、〈庵〉か、
美しい処女花か、神聖な〈**井戸**〉なのかを書き記し
うろつきながら　頭を休めるべきだろう、
私の崇めやまぬ〈主〉がしばしば足を踏み入れては
あらゆる危険を見事に和らげ賜う所で
私には聞こえたように思えた　ある人がこう歌うのが、[4]

I

任せよ、委ねよ、汝うろつき回る思想よ
〈熟考し〉静かに
〈戸口戸口〉から
こっそり見張る者は
何も見い出さないのだ
そういう思想の内部に。

2

事物の皮膚と殻は
美しくても
汝の希いではなく
祈りでもなく
得ただけなのだ
単なる翼なす
〈絶望〉によって。

3

古くからの〈四大元素〉や
〈塵〉を無理強いして
確かにここに彼は
留まらざるを
得ないと言うのは
道に外れているし
公正でもない。

別の世界を十分に探索せよ、これをよく考える者は
〈雲〉の中を旅し、何物も存在しない所に〈**神授の糧**〉を
捜し求めるのだ。

「使徒行伝」第十七章第二十七、二十八節[5]

これは人々に神を求めさせるためであり、彼らが捜し求めさえすれば神を見い出せるということである。実際　神は、我々一人一人から遠く離れておいでになるのではない。

我々は神のうちに生き、動き、存在しているのだから。

（M・四〇五―七）

訳注

（1）*Sychar*.「ヨハネによる福音書」4・5～6［F・一五一］。「イエスはサマリヤのスカルという町においでになった。この町はヤコブがその子セヨフに与えた土地の近くにあったが、そこにヤコブの井戸があった」。

（2）キリストのこと。「使徒行伝」4・10～11、「ペテロの第一の手紙」2・5～6　参照のこと［F・一五二］。

（3）「ヨハネの黙示録」12・1～6の［太陽を着て足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた］女性は、一般にキリストの花嫁である教会を意味すると解釈されている［F・一五二］。

（4）Me thought I heard one singing thus; G. Herbert, "The Collar", 1,35. は次のようになっている、"Me thoughts I heard one calling, *Child!*"［M・七三〇］。

（5）欽定訳版［F・一五三］。

第一部、第二部と揃った一六五五年刊行の『火花散る燧石』からは消えてしまった一六五〇年版の題扉の標章とその作者自らの解説詩に始まり、イエス・キリストへの華麗な?献辞に続く本文の最初の六篇を「再生」「死・対話」「復活と不滅」「最後の審判」「宗教」「探索」と順に眺めてくると、この作品集の方向が閃かに見え始めたのではなかろうか、どうやら一直線ではなかろうけれど。

この詩集の「第二版」なる一六五五年版の表紙には、「ヨブ記」第三十五章第十、十一節の次の詞句が明記されている。「どこにいますのか／我が造り主なる神は／夜の間に歌を与える方は／地の獣よりも多く我らを教え／空の鳥よりも我らを賢くされる方は。」

ところが実は直ぐ判ることだが、この一節には、その前に「しかし誰も言わない」"But none saith" が付いているのである。

ヴォーンは、誰も次のようなことは言わない、というその「言わないこと」がこの作品集では言われ、問われるのだと、澄して表明する。とにかくとても一筋縄ではゆかぬ端倪すべからざる作者の展開する世界に、次稿以降、更に踏み込んでゆくことにしよう。

尚、ヴォーンがジュネーヴ版バイブルを多用することにフォウグルは、自らの編纂した優れた現代版テキスト

（F）でその都度注記してくれる。この「ジュネーヴ聖書」The Geneva Bibleとは、迫害による英国からの亡命者たちによって一五六〇年に、ジュネーヴで印刷・出版されたプロテスタントの英訳聖書を指す。創世記第三章第七節の、アダムとイヴがイチジクの葉でエプロン（aprons）を作ったとあるのをブリーチズ（半ズボン）としたことで「ブリーチズ聖書」The Breeches Bibleなる俗称もある。

一六一一年に、英国王ジェイムズ一世の命により、四七名の聖職者から成る委員会によって前後六年かけて翻訳・編集・公刊された、あの、古雅にして具体性豊かな用語と統一の取れた簡潔な文体のせいで英国散文の宝と讃えられる「欽定訳聖書」The Authorized [King James] Versionではなく「ジュネーヴ版」に多く依ったとは、如何にも、清教徒革命期・共和政時にも終始王党派の立場を堅持したヴォーンらしい屈折した所為だった。

＊参照文献　本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

[A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1992.

[B] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1972.

[BE] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan : Characteristics and Intimations*. London : Cobden Sanderson, 1927 ; rpt. New York, 1969.

[BE-i] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.

[BH] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.

[B・P] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry*（Stratford-upon-Avon Studies 11）London : Edward Arnold, 1970.

[BS] Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London : Dennis Dobson, 1951.

[C] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York : Charles Scribner's & Sons, 1896.

[D] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press,

1962.

[E] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174–75. ［岩崎宗治訳『曖昧の七つの型』（研究社　一九七四）二二一二二一—二二五］。

[F] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday, 1964 ; New York University Press, 1965.

[FK] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.

[G] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.

[GR] Garner, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the Tradition*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.

[H] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.

[HE] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford : Basil Blackwell, 1929.

[HE·1] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford ; 1932 ; rpt. New York : Haskell House, 1966.

[HG] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets : A Casebook*. London and Bashingstoke : The Macmillan Press, 1974.

[L] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets : Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford : Clarendon Press, 1934.

[LH] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston : Little, Brown and Company, 1865.

[M] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford : Clarendon Press, 2nd ed. 1957.

[M·1] Martin, L. C., ed. *Henry Vaughan : Poetry and Selected Prose*. London : Oxford University Press, 1963.

[ME] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton : Princeton University Press, 1969.

[ML] Martz, Louis L. *The Paradise Within : Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London : Yale University Press, 1964.

[ML·1] Martz, Louis L. *The Poem of Mind : Essays on Poetry/English and American*. New York : Oxford Univer-

sity Press, 1966.

[P] Pettet, E. C. *Of Paradise and Light : A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge : Cambridge University Press, 1960.

[R] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes : English Lyrics in a European Tradition*. The Hague : Mouton, 1973.

[S] Simmonds, James D. *Masques of God : Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh : University of Pittsburgh Press, 1972.

[SR] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London : Faber and Faber, 1993.［ロナルド・シュハード編注『T・S・エリオット クラーク講演』村田俊一訳（松柏社 二〇〇一）］。

[S・V] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry : Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y. : Kennikat Press, 1939.

[T] Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery*. The University of Chicago Press : 1947 ; rpt. Phoenix Books, 1961.

[W] Whittier, John Greenleaf. *Anti-Slavery Poems : Songs of Labor and Reform*. London : Macmillan and Co., 1889.

[WG] Williamson, George. *The Donne Tradition : A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley*. New York : The Noonday Press Inc., 1958. 1 st ed. 1930.

[WH] White, Helen C. *The Metaphysical Poets : A Study in Religious Experience*. New York, 1936 ; rpt. New York : Collier Books, 1966.

「川崎1」「ヘンリー・ヴォーンの自然神秘主義」（川崎寿彦『薔薇をして語らしめよ―空間表象の文学』名古屋大学出版会、一九九一。一七四―九八。）

「川崎2」川崎寿彦『鏡のマニエリスム―ルネッサンス想像力の側面』研究社、一九七八。一五二―五八。

拙訳での〈　〉付きとゴチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。